

# とうもろこし畑でつかまえて

— *Field of Dreams* と *Bruce Springsteen* —

三 浦 久

1991年の Grammy Lifetime Achievement Award の受賞式で Bob Dylan は、口ごもりながら、次のように述べた。“Oh, my dad, he said, you know, it's possible to become so defiled in this world that your own mother and father will abandon you. And if that happens, God will always believe in your own ability to mend your own ways.” 本心を決して見せない Dylan 一流の自嘲気味の joke だとしても、彼が自分の父親に言及するというのは希有なことだ。彼は高校の頃から、自らの出生や生い立ちを隠し、何度も家出をし、両親に見捨てられるどころか、両親の存在さえも否定し、自分は孤児であると繰り返し述べ、last name さえ Zimmerman から Dylan に変えてしまった。Don't trust anybody over thirty. を合言葉に、親たちの世界を否定した60年代の対抗文化の music-scene の vanguard であった Dylan は、「時代は変わる」<sup>1</sup> の 4th verse で次のように歌った。

Come, mothers and fathers throughout the land  
Don't criticize what you can't understand  
Your sons and your daughters are beyond your command  
Your old road is rapidly aging  
Please get out of the new one if you can't lend your hand  
For the times, they're a-changing

国中の母さん父さんたちよ

理解できないことを批判しないでほしい

あなたの息子や娘たちはあなたの思い通りにはなりはしない

あなたの道は急速に古くなっている

もし手をかせないのなら新しい道から出て行ってほしい

なぜなら時代は変わっているのだから

60年代ばかりでなく、アメリカの歴史はその始まりから、権威に対する抵抗、対抗の歴史であったことは言うまでもない。加藤秀俊は、「二世は、一世を否定し、親を否定することによって初めて“アメリカ人”に近づくことができる」<sup>2</sup>と述べている。世界の各地から、様々な一政治的、経済的、宗教的一理由で、「アメリカの夢」を求め、本国を捨てて移り住んできた者たちは、自分たちが権威を否定したように、自分たちもまた否定される存在にならざるをえなかった。「アメリカの夢」が夢である以上、それは常に、未来にあり、子供は親を踏み台にし、「アメリカの夢」に手を伸ばした。親もまた、子供たちに、親に依存して生きるのではなく、親を乗り越え、独立心を持ち、自らの手で行く手を切り開いていくことを期待した。

その意味で60年代のアメリカの若者たちはアメリカの伝統の忠実な継承者であると言える。事実、彼らは、東南アジアの小国を相手に、いかがわしい正義を振りかざし、最新の科学兵器を駆使して殺戮を続ける政府に対して、またその政府を支持し、「人類史上最高の豊かさ」のなかで自らの安寧にしか目を向けることができない親たちに対して No! を叫び、17世紀、18世紀にアメリカに入植してきた人たちの理想、「誰の手も借りずに、家族を単位として、じぶんの土地を耕し、食べものをつくり、じぶんの着るものをじぶんで紡ぐ生活」<sup>3</sup>を目指したのである。

60年代、特にその後半、若者から支持された大衆文化は、いわゆる counter-culture と呼ばれ、その特徴のひとつは親を含む既成の権威、道徳の否定であっ

た。文学においては J. D. Salinger の *The Catcher in the Rye* が読まれ、音楽では Dylan, The Beatles, The Rolling Stones を中心に、完全に rock がその主流を占めた。

しかし、Don't trust anybody over thirty. を合言葉にしていた若者たちも今では全て30を超え、Dylan は、すでに51歳である。20世紀最後の10年間は始まった頃を境に、アメリカの大衆文化において顕著な変化が見られるようになった。それは一言で言えば、「父親との和解」というテーマが様々なジャンルに現われてきたことである。父親の否定から父親との和解へ—ここに現代のアメリカの社会を理解する鍵が隠されているのではないか。それはアメリカの成熟を意味しているのか。あるいは、アメリカの衰退を意味しているのだろうか。この小論において、映画 *Field of Dreams* と Bruce Springsteen の作品に見られる「父親との和解」というテーマがアメリカ社会の変化といかなる関わりをもっているか考えてみたい。

## 2

マクルーハンは「1920年代のサイレント映画を振り返って見ると、多くの画面に自動車と巡査が出てくるのを思い出す」と述べているが、Springsteen の作品に関しても全く同じことが言える。

1903年に Ford Motor Company が設立されて以来、車はアメリカ人にとって、status symbol 以上の何かであった。広大な土地に住む彼らは、車がなければどこへも行けない。車こそ自由の象徴である。アメリカの若者たちが飲酒が許可されたり、選挙権が与えられる年齢になるよりも、免許証が取得できる年齢になることの方が重要であると考えるのは当然である。彼らにとって、車を運転するということは、親から独立し、大人になることの最初の一步を意味している。Springsteen の歌の世界は、まさにこの、親から独立し、自由を求め、「アメリカの夢」を追い続ける若者たちの世界である。

最初の二枚のアルバム *Greetings From Asbury Park*<sup>5</sup> と *The Wild, The Innocent & The E Street Shuffle*<sup>6</sup> では、自らの無意識の中から噴出してくる衝動を説明しようとして、マシンガンのように言葉を吐き出しているが、彼自身その衝動を明確にとらえることができないようだ。彼の世界が、彼自身の中でも、そして聴く側にとっても明確になるのは、3rd album *Born to Run* になってからである。彼の出世作となったこのアルバムによって、我々は、彼の作品の中の主人公たちが、なぜ夜毎に暴走しているのか、なぜそうせざるをえないのか知ることができる。

このアルバムのリリースは、建国200年祭直前の1975年であった。album title の “Born to Run”<sup>7</sup> は次のような言葉で始まる —

In the day we sweat it out in the streets of a runaway American  
dream

At night we ride through mansions of glory in suicide machines  
昼、つかむことのできないアメリカの夢のストリートで汗水たらして働き  
夜、自殺マシンに乗り、栄光の館を走り抜ける

このアルバムになって初めて「アメリカの夢」と、その夢がもたらすはずである「約束の地」が歌われる。“Thunder Road” では、“Oh-oh come take my hand / Riding out tonight to case the promised land”（さあ、ぼくの手をとって / 今夜は約束の地を下見に行くんだ）と歌い、“Born to Run” では、“Someday girl, I don't know when, we're gonna get to that place”（いつの日か、いつだか分からないが、あの場所へたどり着くんだ）と歌われる。

Springsteen の歌の世界の若者たちは、建国200年祭に沸きかえる人たちのアメリカを陽のアメリカとするならば、陰のアメリカに住む、アメリカの夢に裏切られ続けた若者たちである。裏切られ続けながらも、アメリカの夢にたい

する信仰を捨てられずにいる若者たちである。彼らは、昼は汗水たらして働き、夜は車をとばし「約束の地」「あの場所」へ到達することを夢見ている。  
“Thunder Road” の最後の二行一

It's a town full of losers  
And I'm pulling out of here to win  
町は負け犬でいっぱいだ  
俺は勝つためにここから走り抜ける

4th album *Darkness on the Edge of Town*<sup>8</sup> でも「アメリカの夢」「約束の地」が随所で歌われる。Talk about a dream / Try to make it real (夢について語り / その夢を実現しようとする), Let the broken hearts stand / As the price you've got to pay (夢やぶれた心を立て直そう / 代価は自分で払わねばならないのだから) (Badlands)。Blow away the dreams that tear you apart / Blow away the dreams that break your heart / Blow away the lies that leave you nothing but lost and brokenhearted / I believe in a promised land (吹き飛ばせ、俺を引き裂くすべての夢を / 吹き飛ばせ、俺の望みをくたくすべての夢を / 吹き飛ばせ、俺を打ちのめすすべての嘘を / 俺は約束の地を信じている) (The Promised Land)

5th album *The River* になると少し様子が変わってくる。アルバム・タイトル “The River” の中の主人公は、職を失い、大切だと思っていたものすべてが消えてしまった状況の中で「かなえられない夢は偽りなのか」と問う。このアルバムを通して伝わってくるのは、アメリカの夢の終焉である。何台もの車が墓石のように地面に突き刺さっている inner sleeve の写真は、まさにアメリカの夢の終焉を象徴しているかのようだ。その雰囲気さがさらに明確になるのは、6th album *Nebraska* で、Well they closed down the auto

plant in Mahwah late that month「その月おそくマーワーでは / 自動車工場がつぶれた」(Jonny 99) という言葉は極めて象徴的である。このアルバムから感じとれるのは、全くの絶望、出口なしの絶望である。このアルバムの最後の作品 “Reason to Believe” では次のように歌われる。

Still at the end of every hard day people find some reason to believe  
辛い一日の終わり、それでも人は信じる理由を見出そうとする

*Born in tha U.S.A.*,<sup>9</sup> この Springsteen の 7th album に収められている album title 曲は、ベトナム戦争の帰還兵の苦悩の10年間を歌ったものである。生まれながらに差別され、苦渋をなめさせられ、ベトナムへ送られ、戻ってきて職がない。アメリカで生まれたのに。アメリカの夢はどこへ行ったのか。

確かにこのアルバムでも、かなえられないアメリカの夢が歌われ、絶望感が満ち満ちている。犯罪、失業、離婚、ベトナム帰還兵等のテーマは、アメリカの世相の忠実な反映である。“No Surrender” の中で、彼は We learned more from a three-minute record than we'd ever learned in school (学校より3分間のレコードから多くのことを学んだ) と言っているが、彼のレコードから、我々はアメリカの社会について極めて多くのことを学ぶことができる。

このアルバムではもう以前のように、夜の闇をつんざいて暴走する若者たちは登場しない。やみくもに走り続けた Springsteen は、そして彼の作品のなかの主人公たちも、年をとり、昔を振り返ることが多くなった。“Glory Days” がその典型である。しかしそれは当然のことだ。初期の粗けずりな言葉づかいが完全になくなったとは言えないまでも、イメージは明確になり、世界をそして自分自身を距離を置いて眺めている。Dylan とは異なる方法で、Springsteen も常に変化している。彼の音楽が生きている証拠である。

Springsteen の作品の主題が「アメリカの夢」であり、その夢の実現のため

の象徴的な媒体が車であることはすでに述べたが、もうひとつ重要な主題がある。それは車ほど前面に出てこないが、彼の音楽が暴走し、一面的になることを防いでいる抑制的な働きを持つ主題である。それは彼の父親、あるいはアメリカ人一般の父親像とかかわるものである。この主題が表面にでたのは 4th album *Darkness on the Edge of Town* の “Adam Raised a Cain” と “Factory” からで、以後どのアルバムにも必ずひとつは父親とのかかわりを持つ作品が登場する。

Springsteen の作品に登場する父親は権威的で強圧的な父親ではない。「アメリカの夢」に裏切られ、失意のうちにその日暮らしを余儀なくされている父親である。

Daddy worked his whole life for nothing but the pain

Now he walks these empty rooms looking for something to blame

親父は 一生 苦しみながら働いてきた

今 彼は 責めることができるものを探しながら部屋を歩いている

(Adam Raised a Cain)

I see my daddy walking through them factory gates in tha rain

Factory takes his hearing, factory gives him life

It's the working, the working, just the working life

親父が雨の中 工場の門を歩いていくのが見える

働き過ぎて耳が悪くなっても 生きていくために働かずにはいられない

働くだけの 働くだけの 働くだけの人生

(Factory)

父親を見る Springsteen の目は決して冷たいものではない。しかし父親の生き方を肯定しているわけではない。生きることに疲れ、屍のようにただ存在

しているというだけの人生。自分は父親の二の舞にはなりたくないと思っている。父親は自らの人生の失敗の責任を他に転嫁しようと「責めることができるもの」を探している。しかしこの父親の中にも、裏切られた「アメリカの夢」に対する煮えたぎるような思いがある。息子はその思いを受け継ぐ。

We were prisoners of love, a love in chains  
He was standing in the door, I was standing in the rain  
with the same hot blood burning in our veins  
Adam raised a Cain

(Adam Raised a Cain)

俺たちは愛情という鎖に繋がれた囚人だった  
親父は戸口に立ち 俺は雨の中に立っていた  
そして二人の血管の中には同じ熱い血が燃えていた  
アダムがケインを育てたのだ

エデンの園を追放されたケインのように、息子は家を出る。それは父親の否定というよりも、父親を打ちのめしたものの否定、幻想としての「アメリカの夢」に対する挑戦である。だから彼は 5th album *The River* の “Independence Day” の中で、They ain't gonna do to me / What I watched them do to you 「父さんが打ちのめされたようには / 俺は打ちのめされはしないよ」と歌うのである。そして彼は結果として父親を否定し、家を出て行く。

Well Papa go to bed now, it's getting late  
Nothing we can say is gonna change anything now  
I'll be leaving in the morning from St. Mary's Gate  
We wouldn't change this thing even if we could somehow

(Independence Day)

父さん もう寝た方がいい 夜も更けた  
何を言っても何も変わりゃしないんだ  
明日 俺はセント・メアリーズ・ゲイトから旅立つ  
もうこの決心は変わらない

しかし彼は父親を見捨てたことに対して罪の意識を持つ。6th album *Nebraska*<sup>10</sup> の中に、“My Father’s House” という作品が収められているが、これは Last night I dreamed that I was a child 「昨夜 ぼくが子供だったころの夢を見た」という一行目から分かるように、夢で見た「父の家」についての深層心理学的な物語である。彼は、夢の中で、夜の闇の中に輝いている父の家を見る。小枝やイバラに傷つけられながらも、彼は林を走り抜けて父に会いに行く。そして震えながら父の腕に抱かれる。そして目覚めた時、彼は二人を引き離したいくつかの辛い出来事のことを考える。彼は服を着、車に乗り、何年も会ったことのない父親に会いに行く。しかし父が住んでいるはずの家には、見知らぬ女がいて、I’m sorry son but no one by that name lives here anymore 「そんな名前の人はもうここには住んでいない」と言う。last verse は息子の罪の意識をよく表わしている。

My father’s house shines hard and bright  
It stands like a beacon calling me in the night  
Calling and calling so cold and alone  
Shining ’cross this dark highway where our sins lie unatoned  
父の家はしっかりと輝いて建っている  
俺を導く夜の闇の松明のように  
その冷たい孤独な光りはしきりに俺を呼んでいる  
その光は我々の罪がまだ償われていない暗いハイウェイのこちら側まで射  
している

「アメリカの夢」に裏切られ、疲れ果てた父親。その父親に対する憐れみと否定、罪の意識、和解への願望が、上述した “Adam Raised a Cain”, “Factory”, “Independence Day”, “My Father’s House” の一連の作品の中に描かれている。この最後の作品では、和解への願望を意識するようになるが、和解はまだ成立していない。それは彼の 8th album *Tunnel of Love* の “Walk like a Man” まで待たなければならない。この album は1987年秋にリリースされたが、この年 Springsteen は38歳で、結婚して2年半が経っていた。“Walk like a Man” は、彼の結婚式における父親との再会の歌である。I remember how rough your hand felt on mine on my wedding day 「ぼくの結婚式の日、あなたの手の荒れた感触を覚えています」という最初の一行から、父親に対する慈しみの念が感じられる。かつてはあれほど嫌っていた疲れ果てた父親の手。ささくれだった労働者の手。彼はその手を握りしめ、昔を思い出す。父親に反発を感じ、暴走を繰り返していた青春時代ではなく、父親がこの世で最も男らしく、最も光り輝いて見えた幼年時代まで遡る。

Well so much has happened to me that I don't understand  
All I can think of is being five years old following behind you at  
the beach

Tracing your footprints in the sand

Trying to walk like a man

(Walk like a Man)

ぼくの人生にはよくわからないことがいろいろおこりましたが  
今思い出すのは海辺であなたの後を追いかけていた5歳の時のことです  
父さんのようになりたいと、思い切り足をひろげて  
砂についたあなたの足跡どおりに歩こうとしていたことです

5歳の時、父親は彼にとって完全無欠な英雄だった。父親もまだ若く、まだ

「夢」は手の届くところにあるように思えた。しかし結局その夢はいくら手を伸ばしても届かなかった。そして—

Well I was young and I didn't know what to do

When I saw your best steps stolen away from you

(Walk like a Man)

あなたの人生の最善の部分があなたから奪われるのを見た時

ぼくはまだ若くて、どうしていいか分かりませんでした

徐々に生活のために父親は「働くだけの人生」になり、「目の中に死を持つ」ようになる。息子はそんな父親に同情しながらも反発する。しかし父親が歩いた道はまた息子が歩く道でもある。そのことのある程度の年齢に達しなければ分からないことなのだろうか。彼は言う—

Well now the years have gone and I've grown from that seed you've  
sown

But I didn't think there'd be so many steps I'd have to learn on  
my own

(Walk like a Man)

長い年月が経ち、ぼくはあなたが播いた種から成長しました

でも自分で学ばねばならないこんなにも多くの道のりがあるとは思いませんでした

ここにおいて、息子は再び父親と出会い、手をさしのべ、全てを許し、和解が成立する。この作品の最後の三行、

Now I'll do what I can

I'll walk like a man

And I'll keep walking

これからは ぼくはできることをやって行くつもりです

あなたのように歩いて行くつもりです

歩き続けて行くつもりです

が示唆していることは、真の独立とは、単に否定することによって得られるのではなく、その否定を更に否定する時に、つまり否定したものととの和解が成立した時に得られるものであるということである。権威に抵抗し否定することから始まったアメリカ、親を否定することによってより「アメリカ人」に近づくことができたアメリカにおいて、ここ数年、少なくとも popular culture のレベルで、以上検討してきた Bruce Springsteen の作品に見られるような「父親との和解」という主題が数多く見られる。

その一つが *Field of Dreams* である。次にこの映画がいかにもその主題を扱っているか見てみよう。

### 3

1989年にリリースされた映画 *Field of Dreams*<sup>12</sup> は、主人公 Ray Kinsella が、自分のとうもろこし畑で If you build it, he will come. という声を聞くところから始まる。Ray Kinsella と父親との関係は、Springsteen の “Adam Raised a Cain” や “Factory” で歌われている親と子の関係に酷似している—「アメリカの夢」に裏切られ、生きることに疲れはてた屍のような父親、そしてその父親に失望し、独立するために家を出るが、そのことに罪の意識を感じている息子。

Ray は言う。I never forgave him for getting old. By the time he was as old as I am now...he was ancient. I mean, he must have had dreams,

but he never did anything about 'em...Dad never did one spontaneous thing in all the years I know him. (ぼくは親父が歳を取ることが許せなかった。今のぼくと同じ歳の頃...もうまったく老け込んでいた。親父にだって夢はあったろう。でもそのことに対して何もしようとしなかった...親父はぼくが知ってるかぎり、ひとつの自発的な行動も起こさなかった。) この映画の冒頭の Ray の monologue によれば、彼の父親、John Kinsella は1896年 North Dakotaに生まれ、38年に結婚し、52年に Ray が生まれた時、造船所で働く老人だった。(Married Mom in thirty-eight, and was already an old man working at the naval yards when I was born in fifty-two.) Ray が生まれた時、父親は56歳であった。

妻の、つまり Ray の母親の、死が、彼にいかなる衝撃を与えたかについては映画は何も言及していない。ただ、年を取ってから生まれ、若くして母を亡くした一人息子を、父親ができるかぎりの愛情をもって育てようとしたであろうことは想像に難くない。Ray 自身も、母親の死に関しては「母はぼくが3歳の時に死んだ」と事実を述べているだけである。3歳ではおそらく彼は母親のことはほとんど何も覚えていなかっただろう。彼が覚えているのは、母の死後、父親がいかに彼を育ててくれたかということである。Mom died when I was three and I suppose Dad did the best he could. Instead of Mother Goose, I was put to bed at night to stories of Babe Ruth, Lou Gehrig, and the great Shoeless Joe Jacksons. (母はぼくが3歳のときに死に、父はぼくを育てるためにできるだけのことをしてくれたと思う。ぼくを寝かせながら、父はマザー・グースのかわりにベーブ・ルースやルー・ゲーリック、それにシューレス・ジョー・ジャクソンの話をしてくれたものだ。)

かつてマイナーリーグでプレーしたが、結局メジャーに上がることができず、野球選手になる夢をあきらめたことがある父親は、息子にその夢を託す。He never made it as a ball player, so he tried to get his son to make it for him. (彼は野球の選手としては大成しなかったので、代わりに息子に夢

を実現してもらおうとした)。しかし、10歳の頃には、野球は野菜を食べたり、ゴミを出したりするのと同じくらい嫌なことになっていた。(By the time I was ten, playing baseball got to be like eating vegetables or taking out the garbage.)

Springsteen は前述したように、彼の作品に登場する父親に対して、わずかながらの憐れみ、あるいは同情の気持ちを抱いているように思われる。親を捨て、家を出て行くことは彼の心の中では決して容易なことではなく、躊躇し続けた後の決断であった。家を出て行く時には、すでにいくらかの罪の意識を抱いている。しかし、Ray Kinsella は父親に対して嫌悪感以外のなものも感じない。だから父親から逃れるために家から最も遠いところにある大学を選ぶ (And when it came time to go to college, I picked the farthest one from home I could find. This, of course, drove him right up the wall, which, I suppose, was the point.)。そして、17歳になった時、荷物をまとめ、父親にひどいことを言って家を出る。(Anyway, when I was seventeen, I packed my things, said something awful and left.)

しかし Ray は、家を出てからしばらくして、罪の意識を感じ始める。そして、父との和解のために何度か家へ戻ろうとするが、結局、家に戻ったのは父親の葬式の時であった (After a while I wanted to come home, but I didn't know how. I made it back for the funeral, though.)。彼の父親との和解はこの映画の最後のところで成立するが、その場面に言及する前に、いかにして彼が若き日の父親と出会うようになったかということを簡単に述べてみよう。

If you build it, he will come. という声を聞いた Ray は、it とは野球場で、he とは Shoeless Joe Jackson であると理解する。つまり、自分のとうもろこし畑に野球場を作れば、父親が愛してやまなかった1920年に八百長のかどで永久追放され、1951年に死んだ Shoeless Joe Jackson がやって来て、play すると考える。隣人たちや妻の Annie の驚きをしりめに、彼は収穫ま

ぎわのとうもろこしをなぎ倒し、整地し、照明塔付きの立派な野球場を作り上げる。冬が過ぎ、春が来ても、Shoeless Joe は現れない。ある晩、Ray と Annie がローンの支払いが難しいという話をしているところへ5歳になる娘の Karin が来て There's a man out there on your lawn. (お父さんの芝生の上に誰がいるわ) と言う。はたしてそれは昔の Chicago White Sox のユニフォームを着た Shoeless Joe であった。しばらく二人はプレーをする。Ray が球を投げ、Shoeless Joe が打つ。別れ際に Joe は Can I come back again? と言う。Yeah. I built this for you. と Ray が答える。その後、Joe は野球界から追放された仲間たちと何度も Ray の球場へやってきて、プレーし、夕暮れになると、とうもろこし畑の中に消えて行った。

その後 Ray は Ease his pain. という第二の声を聞く。his pain とは誰の痛みなのか。その答えは、悪書追放のために学校の体育館で開かれた PTA meeting で与えられる。その meeting で親たちが追放しようとしていた本は、60年代に活躍した Terence Mann という名の黒人の作家が書いた *The Boat Rocker* という小説であった。口々にこの本の悪口を言い、学校の図書館には置かれるべきではないと主張する親たちに Annie は反論する。Terence Mann was a warm and gentle voice of reason during a time of great madness...While other people were chanting "Burn, baby, burn", he was talking about love and peace and understanding. (テレンス・マンはあの狂気の時代に暖かくて優しい理性の声を上げた人でした...他の人たちが「火をつけろ、ベイビー、燃やしてしまえ」と叫んでいた時に、彼は愛と平和と理解を説いていたのです。)

Annie と親たちのやり取りを聞いていた Ray は、his pain とは Terence Mann の苦痛であることに気づくのである。彼はアイオワ大学の図書館で Terence Mann について調べ始める。彼は、Terence Mann が熱狂的な野球ファンでありながら、1956年以後、生の野球を見ていないことを発見する。そこから彼は Terence を野球見物に連れ出すことで彼の苦痛を癒すことができ

るのではないかと考える。Ray はアイオワからはるばるブルックリンへ出かけて行き、世間から身を隠し、隠者のような生活をしている Terence に会いに行く。

何度も手荒く断られた末、ようやく Ray は Terence を野球場に連れ出すことに成功する。そしてそこで彼は第三の声を聞く。Go the distance. そして電光掲示板に映し出された MOONLIGHT GRAHAM, CHISHOLM, MINN, NEW YORK GIANTS, 1922, LIFETIME STATISTICS 1 GAME 0 AT BATS という文字を見る。Terence と Ray が Go the distance. という言葉に従って、ミネソタ州チゾムへ Moonlight Graham を探しに行った経緯は省略するが、二人は“若き” Moonlight Graham をつれてアイオワの Ray の家に戻る。

そこには Shoeless Joe と仲間たちが、試合をするために他のチームを連れてきていた。次の日、試合が終わり、選手がつつぎにとうもろこし畑に消えていった後、Shoeless Joe だけが残って Ray と Annie の方を見ている。そして Joe がバックネットの方をちらっと見ながら言う。If you build it, he will come. Ray が Joe の視線につられてバックネットの方に目をやると、そこには若き日の父親が立っていた。If you build it, he will come. の he とは Shoeless Joe ではなく Ray の父親だったのである。Ease his pain. も、Terrence Mann の苦痛ではなく、彼の父親の苦痛だったのである。さらに Go the distance. とは、Moonlight Graham に会いに行くことを意味しているのではなく、「父親との和解」が成立するためには、Ray の心の中になんらかの「気づき」があり、彼の方から父親の方へ歩み寄らねばならないということの意味している。Ray は Joe に尋ねる。Was it you? Joe が答える。No, it was you. Ray が聞いた三つの声は、結局、Ray の心、つまり彼の無意識の世界から出てきたものなのである。自分が生まれる前の若き日の父親を目のあたりにして、Ray は言う。I only saw him years later when he was worn down by life. Look at him. He's got his whole life in front

of him, and I'm not even a glint in his eye.

最後のシーン。父親が言う。It's so beautiful here. For me...well, for me it's like a dream come true. さらに尋ねる。Is this heaven? Ray は答える。It's Iowa. そして逆に父親に聞く。Is there a heaven? 父親は、当然といった顔つきをして答える。Oh, yeah. It's the place dreams come true. Ray は辺りを見回し、そして自分の家の方を見る。暖かい光りが窓から洩れ、ポーチのブランコからは、Annie と Karin の楽しそうな笑い声が聞こえてくる。Ray は自分に言い聞かせるように、Well, maybe this is heaven. とつぶやく。

「アメリカの夢」は人によってそれぞれ異なっているかもしれないが、60年代の若者たちが目指したものは、Ray のように、豊かな自然の中で、できるだけ自給自足の生活をするものではなかったか。Ray は、父親の二の舞になることを避けようともがいているうちに、「家族を単位として、じぶんの土地を耕し、食べものをつくり、じぶんの着るものをじぶんで紡ぐ生活」を手に入れたのである。

父親は Ray と握手し、背中を向け、とうもろこし畑の方へ歩き始める。Ray はその背中に向かってためらいがちに言う。Hey...Dad? You wanna have a catch? 父親は振り向いて、嬉しそうに言う。I'd like that. 暮れてゆく Iowa の空の下、二人は淡々とボールを投げ合う。14歳の時に拒否したキャッチボールをすることによって、Ray は今、再び父親と出会い、父親の、いや、自分自身の苦痛を癒すことができたのである。キャッチボールをすることとは、まさに二人の心が通い合ったということの象徴である。

*Field of Dreams* は、W. P. Kinsella の *Shoeless Joe* という小説に基づいて Phil Alden Robinson が映画化したものであるが、原作では、作家 Terence Mann は J. D. Salinger になっている。だから映画の中の PTA meeting で追放されようとした本は *The Catcher in the Rye* 『ライ麦畑でつかまえて』であったのである。この本の主人公 Holden Caulfield は、妹

Phoebe に将来なりたいものは何かときかれて、科学者や弁護士のようなものにはなりたくなく、ただ the catcher in the rye になりたいと答える。つまり、広いライ麦畑で遊んでいる子供たちが、遊びに夢中になって、崖から落ちそうになったら、崖のところに立っていて、落ちる前に捕まえてやる人になりたい、と言うのである。<sup>13</sup>

Ray Kinsella は Holden Caulfield の中年の姿であると見ることもできる。Shoelless Joe の訳者、永井淳は「訳者あとがき」で次のように述べている。「主人公でもあるキンセラは...思春期特有の潔癖さで大人の世界の偽善や俗悪を激しく嫌悪する『ライ麦畑でつかまえて』のホールデン・コールフィールドであるという見方も許されるだろう」<sup>14</sup> 小此木啓吾は、ホールデンはアイデンティティ拡散症状群にかかっていると述べている<sup>15</sup> が、その中年のすがたである Ray Kinsella はライ麦畑ならず、とうもろこし畑で、父親を捕まえることによって、自らのアイデンティティを捕まえたと言うことができるだろう。

#### 4

Springsteen の作品と *Field of Dreams* における「父親との和解」の process を検討してきたが、この主題は最近のアメリカ大衆文化の様々なレベルにおいて見ることができる。そのことはアメリカ社会のいかなる変化をあらわしているのだろうか。常に「権威」を否定し、理想の「アメリカ人」により近づくために、「親」を超越しようとしてきたアメリカが、今「親」に手を差しのべているのである。

Springsteen の作品に登場する「父」、それに *Field of Dreams* の「父」とは単に個人の父親であることを超えて、アメリカそのものを象徴しているのではないか。理想に燃えていた建国時代の若々しいアメリカは、「アメリカの理想」「アメリカの夢」を信じ、行く手を阻む全てのものを打倒し、領土を広げて行った。しかし、建国以来210数年を経た現在、アメリカは確実に年老い

ている。「アメリカの夢」は言葉としては存在しても、実在するのは「アメリカの悪夢」「アメリカの悲劇」である。このアメリカの老化を決定的にしたものがベトナム戦争であった。

そのベトナム戦争に反対した60年代の若者たちの理想は、既成の権威や価値観の否定という形であらわれたが、それもベトナム戦争の終焉とともに形骸化されていった。70年代、80年代、アメリカには meism がはびこり、かつての若者たちも年を取り、*Field of Dreams* 中の Terence Mann に象徴されるように、できるだけ社会との関わりを持たない隠者のような生活、あるいは、hippie の生活の裏返しである、ビジネスでの活躍と優雅な家庭生活を重んじる yuppie の生活が求められたのである。

しかし、80年代も半ばを過ぎた頃から、60年代に対する見直しが始まり、社会の中に変化への期待が高まってきた。その最も象徴的なできごとが1992年11月の Bill Clinton の大統領選挙戦における勝利である。周知のとおり Clinton は、60年代、ベトナム戦争に反対し、デモまで組織した活動家であった。そのことを George Bush は、選挙戦の中で繰り返し非難したが、Clinton は動じなかった。彼は、ベトナム戦争は間違いであり、アメリカを愛していればこそ、自らの信念に忠実に、反戦活動をしたのだ、と述べた。勝利が確実にになった11月3日の夜、Arkansas の Little Rock で、彼は勝利宣言の演説を行い、その最後のところでつぎのように述べた。

I ask you to join with us in creating a reunited states, a united country with a new sense of patriotism to face the challenges of this new time...Together we can make the country we love everything it was meant to be.

みなさんをお願いしたいことは、この新しい時代のチャレンジに立ち向かうために、新しい意味での愛国心を持って、リユナイティッド・ステイツを、つまり、みんなの心が一つになった国を、私たちと一緒に創ってほし

ということですから...みんなで力を合わせれば、私たちは私たちのこの愛する国を、その本来の理想的な姿にすることができるのです。

この Clinton の言葉はまさに metaphorical な意味で「父親との和解」を示唆している。Ray Kinsella が、自分が生まれる前の若き日の前途洋々たる父親と出会うことによって「和解」を成し遂げたように、疲れ果てた父親としてのイメージの the United States America から、「アメリカの夢」「アメリカの理想」に立ち戻ることによって、the Re-United States of America を創り出そうと言うのである。

Clinton が「父親との和解」に成功するかどうかは、そう望むけれども、誰にも分からない。しかし、Springsteen の作品や映画 *Field of Dreams* に見られる「父との和解」というテーマから分かることは、アメリカの社会が、そしてその価値観が変化しつつあるということである。しかもその変化は、Dylan の「時代は変わる」という歌に象徴される60年代の counter-culture, anti-establishment 的な変化ではなく、より融合的な、対立を調和させていこうとする変化である。調和への願望自体が対立の存在を証明していることは言うまでもないが、この変化がアメリカ社会の衰退ではなく成熟を意味していると、少なくとも、その方向に進んでいる、と信じたい。(11/4/'92)

## 注

The lyrics by Bob Dylan and Bruce Springsteen and the excerpts from *Field of Dreams* are quoted only as necessary in the context of critical analysis.

1. THE TIMES THEY ARE A-CHANGIN' Columbia PC8786 (1963)
2. 加藤秀俊『アメリカ人』(講談社, 東京, 1991年) p.47

3. 前掲書, p.127
4. マーシャル・マクルーハン『人間拡張の原理』(竹内書店, 東京, 1968年) P.280
5. GREETINGS FROM ASBURY PARK, Columbia KC31903 (1973)
6. THE WILD, THE INNOCENT & THE E STREET SHUFFLE, Columbia KC32432 (1973)
7. BORN TO RUN, Columbia PC33795 (1975)
8. DARKNESS ON THE EDGE OF TOWN, Columbia JC35318 (1978)
9. BORN IN THE U.S.A., Columbia QC38653 (1984)
10. NEBRASKA, Columbia TC38358 (1982)
11. TUNNEL OF LOVE, Columbia OC40999 (1987)
12. Phil Alden Robinson, *Field of Dreams*, (FOUR-IN Creative Products Corp., Nagoya, 1991)
13. Salinger, J.D., *The Catcher in the Rye*, (Penguin Books, Harmondsworth, 1974), p.176~180
14. W. P. キンセラ著, 永井淳訳『シュールス・ジョー』(文藝春秋, 東京, 1985年)  
p.376
15. 小此木啓吾『モラトリアム人間の心理構造』(中央公論社, 東京, 1979年)  
5章「モラトリアム人間と文学」の中の「ライ麦畑でつかまえて」ーサリンジャー  
論 参照